堀川 かくれ 産業・土木遺産

白鳥の昔求めて
御船蔵（太夫堀）と御材木場

堀川の開削時に、尾張水軍の関船や小早船などの軍船を係留する御船蔵が白鳥に作られ、福島正則にちなんで太夫堀と呼ばれ、名古屋城が陸軍、白鳥が水軍の基地となり、堀川で結ばれた。
元和元年 (1615) に日本三大美林の一つ木曽の山と、木曽川が尾張藩領として加増され、御材木場が北隣に作られた。寛永 6 年 (1629) 御材木奉行も置かれ、民間への払下げ流通も本格化、尾州材として江戸や大坂へも運ばれ一大集散地となる。明治時代初頭に民間に払い下げられたが、後に国に買い戻され宮内省管轄となる。
水力発電のため、筏（いかだ）輸送から森林鉄道と中央線が直結した鉄道輸送に変わり、大正 5 年には白鳥駅がつくられた。伊勢湾台風でこの貯木場から木材の流出はなかったが、名古屋市内の貯木場は全て、昭和 43 年開港の西部木材港へ移され歴史の幕を閉じた。
平成元年に開催された名古屋デザイン博覧会を機に埋め立てられ、白鳥会場となり、現在は国際会議場・白鳥公園・白鳥庭園・名古屋学院大学キャンパスなどに活用されている。太夫堀の一部は白鳥公園に残され、堀川への出入り口も残された。平成 27 年には「熱田白鳥の歴史館」が開館し、昔の伐木から筏運搬の様子を描いた「木曽式伐木運材図会」や、昭和初期の貨車による積み下ろしの映像などが見られる。

白鳥貯木場全景　昭和55年

堀川 かくれ 産業・土木遺産

魚市場と明治東海道の賑わい
大瀬子橋

▲ 大瀬子橋　現代

◀「明治の東海道」時代の長大な大瀬子橋

現在の熱田区木之免町、大瀬子公園のあたりは、近海の魚介類はもとより、諸国から船で運ばれた魚を、尾張藩指定の六軒の問屋が売りさばいていた。熱田の浜は織田信秀・信長時代から魚市場として賑わっており、朝夕市場が開かれて、江戸時代は納屋橋上流にあった魚市場が奥の市場、熱田が口の市場と呼ばれていた。
明治以降も賑わっていたが、やがて日比野の中央卸売市場に移っていく。東海道の脇往還だった佐屋海道は、佐屋川の水量が減り、佐屋の湊が使えなくなる。明治 5 年下流の前ケ須（現・弥富市）が宿場になり、ここから福田の宿を経て宮の宿をつなぐ道が開設され、明治の東海道として昭和 8 年まで供用され、それにむけ大瀬子橋も架けられた。
同年、木曽川に尾張大橋が完成するとともに、東海道のルートが現在の 1 号に変更されたが、名古屋市内では「東海通」としてその名が残されている。
また現在の大瀬子橋は、熱田の内田橋付近と千年の工場地帯や南西部を結ぶ役割も果たしている。七里の渡しからは大瀬子・白鳥付近が一望でき、時にはカモメの大群やアオサギ、カワウなども見られる開放的な場所である。